

佛蘭西書巡覧 20

平山 弓月

『チボー家の人びと』を読んでいると私は理解するのです、時代に抗して戦い、流れにさからって泳ぐ作家だけが、深く私の関心をそそるのだと。

アンドレ・ジイド



小説を読む楽しみはなんでしょうか。時間つぶしに、ストーリーを追い、物語の展開を楽しむのも一つでしょう。しかし、作中人物に自己を投影し、新たな自分を模索する、という読み方はいかがでしょうか。

今回取り上げる、**ロジェ・マルタン・デュ・ガール Roger Martin Du Gard (1881-1958)**が、私たちに贈ってくれた『チボー家の人びと』**Les Thibault (1922-40)**の全8部11巻は、長編小説ではありますが、後者の喜びを与えてくれる作品の一つに違いありません。

マルタン・デュ・ガールは、司法関係者を輩出した家系に生まれました。パリの名門フェヌロン中学、コンドルセ高校を出たあと、1899年にグランド・ゼコルの一つである国立古文書学校へと進み、文献の扱い方をしっかりと学びました。ここでの修学が彼の小説作法に大きく関わりあっています。

作家は愛読したトルストイの『戦争と平和』に比肩できる大作として『チボー家の人びと』の構想を得ました。舞台となる各都市での出来事事件にかかわるノートを作り、資料を収集し、膨大な量のカードを準備しました。それらを整理しながら、戦争（第一次世界大戦）によって崩壊してゆくヨーロッパ、その中での人びと、家族関係を克明に浮かび上がらせようと、作品を練り上げてゆきました。

展開されるテーマは多岐にわたりますが、それらは周到に配置され、端正な文章と相まって、息遣いが感じられる総体を形作っています。カトリックとプロテスタント（フランスではユグノーと呼ばれます）、また「軍部・政治家輩の野心と無知と、さらには社会革命家たちの怯懦と逡巡との結果、戦争と、それに伴う悲劇」（山内義雄）が描き出されているのです。

1937年には、第七部『一九一四年夏』*L'Été 1914*にノーベル文学賞が与えられました。この時フランスではマルタン・デュ・ガールの名を知る者はごく一部であった言われています。そのためマスコミ界の人びとは大慌てに慌てたとのことです。

本稿ではこの『一九一四年夏』ではなく、『美しい季節』*La Belle Saison*を取り上げましょう。早くに母親を亡くした主人公の一人ジャック・チボーは、厳格なカトリックの家庭で、高圧的な父親におさえつけられて鬱屈した日々を送っていました。挙句、親しい友人のダニエル・フォタナンと家出しますが、失敗して連れ戻されてしまいます。これをユグノーの所為であるとしたジャックの父親は、彼を少年院に入れてしまいます。兄アントワーヌのとりなしでそこから出たジャックは、夏の別荘で再びダニエルとの日々を取り戻し、その妹のジェニーに心惹かれて行きます。

フランスにはアラン・フルニエの『モーヌの大將』という青春小説の大傑作がありますが（これについては近々取り上げましょう）、筆者は『美しい季節』はそれに引けを取らない傑作だと思っています。

素直に自分の思いを伝えられないのが「幼い恋」でしょう。ジャックとジェニーの関係も、始まりはそのようなものでした。

Une idée folle traversa son esprit : et, sans vouloir réfléchir, avec cette audace que seuls se permettent les timides, il se pencha vers le mur et baisa l'ombre du visage aimé.

彼の心の中を、ふとくるおいしい考えが通り過ぎた。そして、前後の思慮もなく、臆病なものだけのやれる大胆さで、壁の方へ身をかしげるなり、なつかしい人の顔の影にキスをした。
(山内義雄訳)

こういったジャックの行為を理解するには、ジェニーはまだ幼く潔癖すぎました。激情に駆られて、彼女の精神は高ぶり、母親にその嫌悪感を吐露します。しかし、彼女の心は、本人が気づかないままにジャックの方へと傾斜してゆくのです。その後の展開は、ぜひご自身で確かめてください。読む人それぞれで、この作品が与えてくれるものは様々な容貌を見せるでしょう。これこそが読書の楽しみなのです。

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)